

宇佐八幡と八幡神

2020, 11. 8

横浜歴史研究会 齋木 敏夫

神社成立以前の宇佐地域

608年裴世清が筑紫から瀬戸内海に入ったとき、中国人が住むという「秦王国」の存在を知らされたと隋書に記されており、702年の戸籍台帳(正倉院文書)によると豊前の人口の9割以上が秦氏であり「秦王国」を形成していた記載されている。秦一族は技術をもたらし、現地の人たちにそれを伝え、同化したものと思われる。それ以前に卑弥呼の後継者トヨは投馬国(福岡県東部、大分県、山口県西部)出身であり、豊(トヨ)の国と呼んだのであろう。7世紀末に豊前国と豊後国の二つに分けられた。豊前は福岡県東部の北九州市東側、筑豊地方の東側、京築地方の全域と大分県北部から成っていた。新羅系加羅人であった秦氏は当初香春岳山麓で銅を採掘していた。ここの銅から八幡宮の神鏡が作られている。「宇佐市にある標高647mの御許山(オホトク)には神代の昔、比賣大神が高天原の神々より「道の中に天降り、天孫をお助けするとともに天孫の篤い祭祀を受けなさい。」という神勅が下されたと日本書紀に記されている。このことは外来の秦氏と海人であった宗像族とが同化したことを意味しており、宇佐神宮の第二殿に祀られている比賣大神が出来たと思われる。秦氏の渡来は五世紀後半以降、数度にわたりあったとされている。豊前に留まらず山背国南部(太秦)など日本全国に拡がり、様々な活躍をしたことは間違いない。

725年 宇佐八幡宮創建、

日本の神社数の第一位は約三万五千の稻荷社、稻荷ももとは秦氏の信仰である。全国に約二万四千という日本第二の分社を数えるのが八幡社だ。宇佐に秦氏一族の辛島氏が入植し、香春岳近くの築上郡築上町にある矢幡八幡宮(元宮八幡宮)の新宮として八幡神を祀る宇佐八幡宮を建てたとされている。八幡神の「八幡」とは唐の軍制の象徴である「八幡・四銚」の八幡に由来するであろうといわれている。八幡は「ハチマン」と呼ばれているが日本霊異記によると「ヤハタ」と言うのが本来の呼び名であったといわれ、現在も北九州市には八幡「ヤハタ」区がある。八幡とは文字通り多数の幡を立てて祭る神なのだ。秦氏が「ヤハタ」を信仰したのは同じ読み方に起因するものであろう。磐井の乱を鎮めた継体天皇は磐石の地位を築き、豊国は大和朝廷の軍事最前線となり、社殿は南の隼人に向かって造営されたと思われる。今に続く宇佐神宮の誕生である。応神天皇は継体天皇皇統の高祖神として奉られるようになり、古代からの八幡神と習合し、祀られるようになったようだ。(菅田八幡宮では欽明天皇によって応神天皇陵前に神廟が設置されたことをもって創建としており、最古の八幡宮を称している。)749年大仏造立のための黄金出土を託宣し、次いで東大寺鎮守・手向山八幡宮として堂々の入京となった。

弥勒寺

弥勒寺の建立は神と仏を一体するためのもので国家鎮護仏として弥勒菩薩(講堂本尊)を本尊とした。

当時の社会を覆っていた疾病苦難の救済仏として薬師如来（金堂本尊）を併せ祀ったものと思われる。伽藍配置は奈良の薬師寺と同じで2塔、金堂、講堂であったそうだ。弥勒寺伽藍は整備され、諸国国分寺・大宰府観世音寺・下野薬師寺とともに鎮護国家の寺院とされた。

八幡神の入京

749年東大寺の大仏建立に際し、香春岳（カラダケ）の銅を提供、大仏鑄造作業に協力し、「全国の神を率いて協力する」という託宣を出し、宇佐八幡神は平城京に入京した。聖武天皇が理想とする仏教国家建設の最終段階で亡き行基に替わるものとして大仏を守護する神とする意図があったと思われる。その功績が認められ、国家神としての地位が確実なものとなり、東大寺境内に手向け山八幡宮として祀られるようになった。なお鎌倉時代には快慶作の僧形八幡神坐像（国宝）が安置された。

孝謙上皇と道鏡

中央から送り込まれた大神（わか）氏（大神の祭祀を司る三輪氏・大神氏の始祖は大田田根子）は八幡神が国家神となっていく過程で主導権を掌握していった。当初「道鏡を天皇にすべき」との託宣を出したのは大神氏の巫女ようだ。和氣清麻呂が宇佐に参宮し、再度託宣を受けると託宣は覆り、道鏡は後日追放となってしまった。この託宣は辛島氏の巫女が出したようだ。宇佐八幡宮の朝廷接近は活発な託宣活動により再び復活を見せ、八幡神と仏教との神仏習合体の先駆的現象を見せるようになった。

781年桓武天皇即位

朝廷は宇佐八幡に鎮護国家・仏教守護の神として八幡大菩薩の神号を贈った。

即位直後 聖武天皇系の抹殺によって生じたと考えられる様々な不吉な出来事を封じ込めるために八幡神を「出家」させ、御霊を封じこめようとしたと思われる。この頃より伊勢神宮を凌ぐ程の皇室の宗廟として崇拜の対象となり繁栄し、信仰を集めた。

六郷満山

718年に仁聞（ニモン）菩薩は八幡神の生まれ変わりとして宇佐・国東の地に神仏習合の原点となる山岳宗教「六郷満山」を開かれたといわれ、2018年に開山1300年を迎えたが仁聞自体が疑わしい存在であり、実態はもう少し後のことであろう。国東（クニト）の読み方は第12代景行天皇が熊襲征伐で当地へ来た際に「その見ゆるは けだし国の埼ならむ」と豊後国風土記に記されており、埼が東に代わったそうだ。六郷満山の寺は仁聞文化圏と名づけられ、学問の本山、修行の中山、布教の末山という三山体制をとっていた。麓には平安時代宇佐八幡宮の荘園であった田染荘（タジノシヨリ）があり、当時の状態を今もよく残っていて重要な文化的景観となっている。曲がりくねった畝、少しずつ段差が出来、棚田の様相を示している。これにより近代的な大規模な農地にすることも出来ず旧態を遺しているようだ。

六郷満山の寺

富貴寺 大堂(国宝)は藤原期の古建築で宝形造、行基葺、宇治平等院鳳凰堂・奥州平泉中尊寺金色堂と並び、日本三大阿弥陀堂の一つに教えられ、九州では最古の木造建築物だ。室内には本尊阿弥陀如来坐像(重文)が祀られている。境内には笠塔婆5基、国東塔大小2基等の石造物がある。

真木大堂(傳乗寺)収蔵庫に9体の仏像(いずれも重文)がある。本尊阿弥陀如来坐像は平安時代末の寄木造、当時の特徴である彫りの浅い優美な像だ。本来薬師如来の周りには四天王が阿弥陀さんの周りにあり、寄せ集めの感がする。大威徳明王像は水牛にまたがり、六面・六臂・六足を持ち大憤怒といわれる激しい怒りの表情をしており、日本一の大きさだそう。不動明王像は二童子を従えカルラ光背(火の鳥を表している光背)を背に立っている。コンガラ、セイタカの二童子は写実的な像だ。境内には鎌倉期の国東塔がある。

熊野磨崖仏(重文と史跡)磨崖仏近くに鬼が一晩で築いたと言われている乱積の石段があり、それを上ると大きな岩に高さ8mの不動明王像と高さ6.7mの大日如来像の2体が彫られている。不動明王はユーモラスな、大日如来は威厳のある顔をしている。平安後期の作と推定されている。

長安寺 太郎天及二童子立像(重文)は不動明王の化身としてこの地域で信仰されたと云わる。

天念寺 毎年旧正月に重要無形民俗文化財の「修正鬼会」が行われる。川中不動尊は前を流れる川の真ん中に鎮座している。文化伝習施設「鬼会の里」に平安時代の檜の一木造の木造阿弥陀如来立像(重文)がある。

岩戸寺 阿形像には1478年の銘があり、在銘の丸彫り仁王像としては日本最古のものだ。国東塔(重文)は1283年の銘があり、その造形美から国東半島を代表する最古のものだ。

泉福寺 曹洞宗の九州総本山、開山堂(重文)1636年再建。仏殿(重文)1524年建立、禪宗様仏殿だ。

両子寺(ワカヅ) 山門の仁王像は国東最大級の大きさと造形美を誇っている。

最澄宇佐へ

804年最澄は入唐に先立って和氣氏や秦氏出の僧勤操の勧めもあって弥勒信仰の盛んな豊前に立ち寄り香春岳に登り、渡唐安全を宇佐宮に祈った。無事帰朝した最澄は806年天台宗を開き、814年に唐への渡航の無事と天台宗開創の御礼に再び香春を訪れた。法華経を通じて弥勒を強く信仰し、この地で法華八講の法会を行い、功德を永劫に遺すため梵字を岩に刻み、七堂伽藍を建立し、国家鎮護と安寧の祈願所として賀春山神宮院と名づけた。天台宗の寺となり、後に弥勒寺に統合され、神宮寺となった。これにより六郷満山の諸寺も天台宗となった。

神功皇后の神格化

823年八幡神及び比売大神の2殿であった宇佐宮に第3殿が造営され、神功皇后が祀られるようになった。出家した故に「戦う軍神」としての意味が希薄化した八幡神に再び「軍神」としての役割を補完する意味で神功皇后が祭祀されたとされる。

この霊の登場により八幡神は再び軍神としての側面を復活させる事ができた。

石清水八幡宮の成立

859年大安寺行教が宇佐八幡宮から八幡大菩薩を男山に勧請し、翌年社殿を造営した。山城と長津の国境で都の裏鬼門にあたり、王城守護の役割で勧請された。神仏一体の宮寺として最初に創建されたものといわれる。源義家が当社で元服したこともあって八幡太郎義家と名乗り、武神として信仰され、源氏の広がりとともに鶴岡八幡宮等各地に八幡宮が勧請され、源氏の氏神となった。これにより全国の寺の鎮守神として八幡神が勧請されるようになり、八幡神が全国に広まる事となった。

その後足利氏・今川氏・武田氏、徳川氏等の源氏諸氏族から氏神として崇敬され、武神・弓矢の神・必勝の神とされるようになった。

本地垂迹思想が広まると僧形で表されるようになり、これを僧形八幡神というようになった。

宇佐神宮の神仏分離

明治維新となり、神仏分離令により、神宮寺であった弥勒寺は廃寺となった。神職による「破仏乱暴ノ所業」が激しく、大分県下では最も激しい廃仏毀釈が行われた。

極楽寺 本尊は阿弥陀如来立像で宇佐神宮境内の第貳堂にあり、弥勒菩薩坐像(県指定)は弥勒寺の本尊であった。

大善寺 薬師如来坐像(重文)は弥勒寺金堂の本尊、鎌倉時代、檜の寄木造りで像高280.0cm、脇侍には日光・月光菩薩を配している。

大楽寺 1333年宇佐神宮大宮司の菩提寺として創建と伝える。木造弥勒仏及両脇侍像(重文)中尊は檜の寄木造、平安時代後期の作とされる。脇侍は法苑林菩薩及び大妙相菩薩となっている。木造四天王立像(重文)は弥勒仏を囲んで四方に立ち、いずれも檜の寄木造で平安時代後期の作とされる。

現在の宇佐神宮

八幡様の総本宮で皇室も伊勢の神宮につぐ第二の宗廟として崇敬があり、一般の人々からも鎮守の神として古来より広く親しまれている。若宮神社(重文)は仁徳天皇をお祀りしており、社殿は高床式、寄棟造、檜皮葺だ。西大門(県指定)は文禄のころ改築されたといわれ、桃山風の華麗な門で切妻、向唐破風造、檜皮葺となっている。その手前にある宇佐鳥居は台輪を柱上に載せ、額東が無い宇佐古来の形式を保っている。南中楼門(県指定)は入母屋造、檜皮葺の楼門、隼人と対峙するため南向きの正門となっている。勅使門であり、通常は開かずの門だ。本殿(国宝)は八幡造、二棟の切妻造平入の建物が前後に接続した形で、両殿の間に一間の相の間(馬道)がつき、その上の両軒に接する処に金の雨樋がある。檜皮葺で白壁朱漆塗柱の華麗な建物が南向きに横一列に並んでいる。奥殿を内院、前殿を外院といい、内院は神様の寝所、外院は昼間の居所となっている。

参考文献：

「八幡神とは何か」(飯沼賢司、角川選書、2004)

「八幡神と神仏習合」達日出典、講談社現代新書、2007

「寺社が語る 秦氏の正体」(関裕二 祥伝社 2018)